

2022.8.16

あの虐殺テロを起こした岡本公三はいま…

## テルアビブ空港乱射事件から50年 現地紙が報じた 「日本人実行犯の数奇な物語」



1972年7月12日、イスラエルの軍事法廷に出廷する岡本公三 Photo by Keystone/Hulton Archive/Getty Images

[画像ギャラリー](#)



[ハアレツ（イスラエル）](#)

Text by Rotem Kowner

1952年にイスラエルのテルアビブ空港で、日本赤軍のメンバーが26人を殺害したテロから半世紀。事件の背景と、唯一生き残った実行犯である岡本公三の知られざるその後について、イスラエル紙「ハアレツ」が報じている。

### 日本赤軍とレバノン

今から50年前、世界の民間航空産業は深刻な打撃を受けた。原因は石油危機でもなければ、感染症の世界的大流行でも、飛行機事故でもなく、イスラエル第2の都市テルアビブのロッド空港（現ベン・グリオン空港）で起きた虐殺だった。

この事件の社会的な影響により、世界中の搭乗客は、今日に至るまで飛行機に乗るたびに事前に厳格な保安検査を受けなければならなくなっている。

個人レベルでも、この1972年5月30日の事件の残響は尾を引いている。殺害された26人の被害者の遺族たちは、今も愛する家族を失った悲しみに暮れており、犯人らが訓練を受けた北朝鮮に賠償を求める闘いを続けている遺族もいる。

他方、実行犯の一人は現在もなお、レバノンの首都ベイルートで亡命生活を享受しており、襲撃の背後にいたテロリスト集団のリーダーは、長期にわたる刑期を経て2022年5月末に出所したところだ。

ロッド空港虐殺事件の物語は、中東から遠く離れた、中東とはつながりのない国から始まった。その国とは、日本である。

第二次世界大戦後の日本では、米国をはじめとする「帝国主義」勢力と同調する国に対し、市民による抵抗運動が広まった。1960年に日米安保条約が結ばれると巨大な抗議運動のうねりが生まれ、それは60年代を通じて続いた。

皮肉にも、新たな世界大戦への不安、ベトナム反戦運動、学生による抗議運動は、日本の大学のキャンパスに暴力的なグループを生み出し、なかでも最も有名かつ過激だったのが赤軍派だ。「世界革命論」の概念に惹き付けられた共産主義者同盟のメンバーによって1969年に設立された。

赤軍派が最初に遂行した重要な作戦は、1970年3月に日本の航空機をハイジャックして北朝鮮に向かわせた、よど号ハイジャック事件だ。事件直後にメンバーの多くが逮捕されたほか、組織内で権力闘争が起こった結果、最終的に14人が同志の手によって殺されることになった。

重信房子は赤軍派の主要メンバーだった。1971年、重信は赤軍派の新しい分派「日本赤軍」を結成。その約1年後、警察に追い詰められた重信は、当時、多くのテロ組織が集まっていたレバノンに出国した。

## 日本人3人がテロ実行犯になるまで

レバノンは、日本赤軍にとって未知の土地ではなかった。メンバーの中には、それまでの2年間にすでに同国を訪れ、パレスチナ解放人民戦線（PFLP）と緊密な関係を築いていた者もいたからだ。そのため、重信は1972年3月にベイルートに到着した際、自身の組織だけでなくPFLPのメンバーたちからも温かく迎えられた。前者のメンバーは、ほんの少し前までは日本で学生をしていた者たちだった。

そして同年5月末、日本赤軍の3人のメンバーが、ロッド空港襲撃の実行役を買って出るようになった。作戦を計画したのは、イスラエルのサフエド生まれのパレスチナ人医師で、PFLPのリーダーの一人になっていたワディ・ハダドだった。

ハダドの人生は、その6年後に毒殺によって終わりを告げる。一説によればチョコレートに仕込まれた毒によって、別の一説によれば何ヵ月にもわたって歯磨き粉に仕込まれた毒によって。いずれにせよ、イスラエルの諜報機関モサドの仕業と見なされている。

ハダドが日本赤軍の3人を実行役に選んだ理由には、当時、この日本の組織の国際的な知名度がまだ低かったことがあるが、同時に、3人が訓練中に見せた執念も関係しているだろう。

作戦を実行する前の打ち合わせで、3人は自らの命を犠牲にする覚悟があると言い、任務を遂行したあかつきには、自分たちの顔をつぶすために手投げ弾を爆発させることに決めていた。そうすれば身元が特定されることはなく、家族の名誉を傷つけずに済むと考えたのだ。

3人はまずフランクフルトへ飛び、そこからローマへ向かい、そこでテルアビブ行きのエールフランス便のチケットを購入した。

午後10時にロッド空港に到着し、悠々と手荷物受取所へ向かった3人は、周囲に一切怪しまれなかった。そして自分たちのスーツケースが運ばれてくると、それを開けて短機関銃と手投げ弾を取り出し、発砲。2分で26人を殺害し、さらに80人を負傷させた。襲撃は完全に無差別だった。

犯人らの銃弾が尽きたところで、1人は射殺され、2人目は自殺。3人目の岡本公三は負傷して逃亡を試みたが、到着ロビーで取り押さえられた。

当時24歳の岡本は、この後、いや応なしに法廷劇の主人公になっていく――。

## 父親は息子の死刑を望んだ

岡本はイスラエルの軍事法廷で裁かれたため、死刑判決を受ける可能性もあった。というのも、同国の軍事法廷では1967年の原則的判断に基づいて死刑を求刑しないことになっていたが、岡本の裁判が終わりに近づくなか、政府がこの判断の改正について議論を始めたからだ。

激論が交わされるなか、シモン・ペレス運輸大臣（のちの大統領）は、この事件に関しては改正を支持した（「本件はまさにジェノサイドの域に迫っている」と発言）。しかし、他の大臣の大半はこれに反対し、死刑求刑はしないという原則的判断は維持された。

それでもなお、岡本の死刑の可能性をめぐる議論はイスラエル国内だけでは終わらず、遠く日本からも極刑を求める声が上がった。岡本の父親が息子の死刑を望んだのだ。

日本で真っ先にこの事件の責任を負ったのは、岡本の父親だった。実は、ロッド空港虐殺事件の2年前に、同じく赤軍派のメンバーだった岡本の兄が、先述のよど号ハイジャック事件を起こしていた。当時、小学校の校長だった岡本の父親は、責任を取るかたちで、その職を辞した。

そして今度は、また別の息子によるイスラエルの空港襲撃である。父親は、それまで以上に壮絶な恥辱に直面することになった。一家の汚名の中心が末息子になっただけでなく、事態は国内から国際舞台へと移り、日本という国家全体に不名誉を背負わせることになったからだ。

他に道はないと考えた岡本の父親は、信じがたい行動に出て息子が死刑に処されることを要求した。イスラエルのゴルダ・メシア首相に個人的な手紙を送り、深く謝罪するとともに、「息子が徹底した捜査を受けた後に、可及的速やかに処刑されること」を切に求めた。

## 「赤軍戦士は死んで星になるのだ！」

岡本自身も、自らの行為の責任を全面的に負おうとした。尋問には模範的に協力し、迅速に処刑されることを期待して自白している。岡本が「生存者の罪悪感」を抱いていたのは明白だった。ただし、彼の言動は必ずしも新左翼とはつながらない、明らかな日本人らしさを示してい

た。

岡本を弁護したマックス・クリッツマンは、イギリス委任統治時代のパレスチナでシオニストの地下組織「イルグーン」の多くのメンバーの弁護を引き受けた人物だったが、依頼人である岡本の姿勢に苦労させられたという。

たとえば、岡本の助けになるべく、本人の反対をよそに精神科医に精神鑑定を依頼したが、岡本は正気であると報告されてしまった。

また、裁判の終盤、クリッツマンは依頼人の年齢が起訴状に明記されていないことを発見。この年齢が定かでない状況を利用し、18歳未満に対する死刑判決は禁じられていることを指摘した。ところが、その直後に岡本自身が立ち上がり、自分の実年齢を述べてこの点の不確かさを払拭してしまった。

終身刑の判決を受ける直前、岡本は最終陳述でこう語っている。

「子供のころ、人は死ぬと星になると教えられました。我々3人の赤軍戦士は、死んだらオリオンの星になりたいと考えていた。空港で我々が殺害した人たちもまた、みな同じ天上で星となるのだと思うと心がやすまります。革命が続くにつれ、空の星は数を増すだろう！」

岡本親子に劣らず印象的だったのが、日本政府の対応だ。実行犯の3人は日本で指名手配されており、当時の日本とイスラエルの関係はかなり冷え込んでいたにもかかわらず、日本政府も早々に事件に対する責任を負った。官僚をイスラエルに送り、国として深い謝罪の意を表し、生存者たちには総額100万ドル以上の賠償金を支払った。

その一方で、日本の当局は海外に身を寄せた日本赤軍のメンバーを容赦なく追跡した。捕まらなかったり日本に引き渡されなかったりした少数のメンバーは、今も指名手配犯だ。彼らの写真は日本にあるすべての交番の外に設置された掲示板に張り出されている。

## 独房で心を病んで「四つんばい」に

執拗な追跡が実を結んだ例もある。最も特筆すべきは、2000年の逮捕劇だ。ロッド空港の虐殺事件から28年後のこの年、日本赤軍のリーダーである重信房子が、偽造パスポートで日本に帰国。重信は、入国審査は通過したが、まもなく逮捕されて裁判にかけられた。

20年の刑期を終えて、2022年5月末に出所。その直前の3月に支援者たちに送った手紙のなかで、重信は自身の行為をわび、感謝の気持ちを述べるとともに、服役中に患ったがんとの闘病を続けるつもりであることを語った。

岡本の物語もまだ終わっていない。イスラエルのラムレ刑務所内の厳重警備棟「Xウィング」の独房に収監された岡本は、ほどなくして精神を病んだ。ある情報筋によると、一時は四つんばいになって食事を床に置くよう頼み、沐浴を拒み、自らに割礼を施そうとした。それも、爪切りで試みたという。

1985年に雑居房に移されたが、しばらくすると、イスラエルがこの年にパレスチナ解放人民戦線総司令部派と行った捕虜交換で釈放され、リビアへと送られ、その後はシリアに移り住んだ。だが1997年にレバノンで、他の日本赤軍メンバー4人とともに偽造パスポートを使用した容疑で逮捕された。

全員が懲役3年の判決を受けて服役。出所後、岡本以外の4人は日本政府の要請で日本に送還されたが、岡本だけはレバノン政府に政治亡命を認められた。レバノンは長くイスラエルと対立しており、ロッド空港虐殺事件に関与していた岡本に便宜を図ったのだ。

現在74歳になった岡本はベイルートで暮らしており、日本の支援者たちとインターネット経由でつながりを保ち、「静かな生活」を送っているという。

## PROFILE

翻訳：木村理恵 [〈翻訳記事一覧〉](#)



ハアレツ（イスラエル）

#イスラエル  
#テロ  
#レバノン  
#世界が見たニッポン  
#中東